

外国人が見た新潟～町を流れる堀～

新潟町の暮らしに欠かせなかった堀。明治の開港により、新潟にも外国人が訪れ、町を流れる堀と人々の暮らしを目にしました。

イギリス人旅行家のイザベラ・バードとドイツ人建築家のブルーノ・タウトは、新潟の印象をそれぞれの著作に記しています。明治11(1878)年に新潟を訪れたバードは『日本奥地紀行』の中で、堀と川縁の柳の美しさに触れ、「運河は新潟の非常に魅力ある特色となっている」と記しています。対して昭和10(1935)年に訪れたタウトは『日本美の再発見』の中で、新潟を「日本中で最悪の都会」と表現し、「街を貫く運河は悪臭紛々としている」と記しています。

江戸時代から生活用水としても利用された堀は、明治初期にくすもと県令楠本まさたか正隆の開化政策により整備が進みましたが、その後護岸の崩落や大正11(1922)年の大河津分水通水による水量の減少で、水質が悪化していききました。新潟の堀は、「柳都新潟」を形づくるとともに、人々の生活に密着したものでした。



バードのスケッチをもとにした堀の絵(左、『市史にいがた3』より転載)と明治初期の西堀の様子(右)。堀には橋が架けられ、岸が整備されている。